

正宗白鳥

森鷗外の「妄想」

森鷗外の「妄想」

芥川氏の遺書のうちに、マインレンデルの名が出ていたので、私は森鷗外の小品「妄想」を思い出した。鷗外の人生観が簡単明晰に述べられているこの小品に於て、私は始めてマインレンデルの名を知り、併せてその救抜の哲学の一端を覗くことが出来たのであった。

それで、私はこの頃、「分身」と題された鷗外の短篇集によって、「妄想」を読直した。そして、これ迄に、二度も三度も読むたびに感じたのにも勝った感想を新た

に得た。普通人でもそうであるが、殊に作家は、青年期に受けた感化は一生拭い去ることが出来ない位に強いものである。鷗外は、青年期にベルリンで学んで、「全く処女のような官能を以て、外界のあらゆる出来事に反応して、内にはかつて挫折したことのない力を蓄えていた時のことであつた」と、作者自身が言っている。そのとき、彼れは、青年らしい煩悶を感じた。「寝られない夜なかに、幾度もこの苦痛を嘗めた」。「どこかに慰藉になるようなものはないか」と捜したが、しかし、それは徒勞であつた。そこで、或る夜、哲学の本を読んで見ようと

思い立って、夜の明けるのを待ちかねて、ハルトマンの無意識哲学を買いに行った。これが哲学というものを覗いた最初であつたという。そして、ハルトマンの錯迷打破には強く引きつけられたそうである。

最初に読んだ哲学で、「餓えて食を貪るように読み」しかも、強く引きつけられたという哲学が、鷗外の一生にいくらかの感化を持ちつづけられないで済んだ筈はないだろうと思われる。彼れは芸術の批評を試みるにあたり、ハルトマンの美学を根拠として論じていながら、その美学の依って出ずるところの無意識哲学を信仰していなか

ったので、高山樗牛などに非難されたのであつたが、しかし、鷗外の思想や作物に、この哲学の感化が微見しているように思われないことはない。

マインレンデルはハルトマンの所謂「迷いの三期を承認した」ところで、あらゆる錯迷を打破って置いて、生を肯定しろと云うのは無理だと云うのである。これは皆迷いだが、死んだって駄目だから、迷いを追っ掛けて行けと云われぬ筈だと云うのである。「人は最初に遠く死を望み見て、恐怖して面を背ける。次いで死の廻りに大きい圏を描いて、震慄しながら歩いている。その圏が

漸く小さくなって、そろそろ疲れた腕を死の項に投げかけて、死と目と目を見合わす。そして死の目の中に平和を見出すのだ」と、マインレンデルは云っている。そう云って置いて、マインレンデルは三十五歳で自殺したのであるが、鷗外自身は、「死の恐怖が無いと同時に、マインレンデルの死の憧憬もない。死を怖れもせず死にあらざるもせず自分は人生の下り坂を下って行く」と云っている。この境地はマインレンデル以上であるかも知れないが、しかし、鷗外は、「謎は解けないと知って、解こうとあせらないようにはなつたが、自分はそれを打棄

て、顧みずにはいられない」とも云っている。

それで、ニイチェの超人哲学を読んだ彼れは、「懶眠の中から鞭うち起された」ように感じたが、しかし、「死」については、「永遠なる再来」は慰藉にはならないので、「ツアラツストラの末期に筆を下し兼ねた作者の情を、自分は憐れんだ」と云っている。通俗ということは一切嫌っていたらしい彼れは、哲学に於ても、一切の折衷主義に同情を有せないなので、パウルゼンの思潮などには触れずにしまったと云っている。

その他、いろいろ「妄想」に書いてあることを、私は、

歳を取るにつれて味わい深く感ずるのである。

彼れにも「舞姫」や「うたかたの記」などを書いた時代があった。それ等青春の作品と、「澁江抽斎」や「北條霞亭」のような晩年の作品とを比べて見ると、この書齋的作家も、芸術的気持の上の春から冬までを、充分に表現していると云っている。「大抵人の福さいわい」と思つてゐるものに、酒の二日酔をさせるように跡腹の病めないものは無い。その無いのは、只芸術と学問との二つだけだ」と、ハルトマンが云つていて、鷗外自身は、「跡腹の病めるあらゆる福を生得好かないので」、自然この芸

術と学問との二つの外にはすることがなくなつたと云つて
いるが、解釈の仕様によつては、芸術も随分跡腹の病
めるものである。自然主義の謂うところの「現実暴露」
やプロレタリア文学者の謂うところの「階級闘争」など、
芸術も近来すさまじきものとなつて、跡腹の病めない人
間の弄びものではなくなつてゐる。「妄想」などの収め
られている短篇集「分身」は、その題目の示す如く、作
者自身の日常の感想や、行動を語つた小品を集めたもの
である。鷗外全集中では、文学的価値は最も乏しいもの
であるが、彼れの人となりを知るには最も役に立つので

ある。自然主義全盛期には、彼れの作品は、「遊びの文芸だ」と、非難の意味で批評されていたので、彼れはそういう批評に対して、正面から反駁はしなかったが、屢々それ等の批評家を擲^や揄^ゆし冷笑していた。「分身」中の「不思議な鏡」などはその代表的作品である。この小品が、自然主義の牙城であった「文章世界」に現われた時には「鷗外は歳甲斐もなく浅薄な皮肉を云っている」と我々は感じたのであったが、今読むとユーモラスで面白い。歴史的興味もある。

「遊びの心持で万事を扱うので、真剣味がない」と云つ

ても、ハルトマンの所謂跡腹の病めない人間の弄び物たるに過ぎないのが、芸術の本領であるのなら、「遊び」の心持のあるのが当然なのではあるまいか。今日「ブルジョア文学はいけない。プロレタリアの臭いがなくちやならん」と、当年の自然主義作家が、新代の作家に非難されるのも、昔を思い出すと、文学史上の一現象として面白い。こうも云ったりああも云ったりしなければ、人間の世は送れないのである。ハルトマンの所謂「迷い」の第三期は、幸を世界過程の未来に求めることにあるのだが、「これは世界の発展進化を前提とする。ところが

世界はどんなに進化しても老病困厄は絶えない。神経は鋭敏になるからそれを一層切実に感ずる苦は進化と共に長ずる」のであって、この根本的原理は、十九世紀末の哲学者の用意周到な説明を待たなくても分っていることである。五十世紀が来ても百世紀になっても、この原理が嘘になる訳はないと思われる。

それで、初中後の「迷い」の三期を閲し尽しても、幸福は永遠に得られないと断じたハルトマンは、「この世界は有るが好いか、無いが好いかと云えば、無いが好い。それらを有らせる根元を無意識と名付ける。それだから

と云って、生を否定したって、世界は依然としているから駄目だ。現にある人類が首尾よく滅びても、またある機会には、次の人類が出来て、同じ事を繰返すだろう。それよりか、人間は生を肯定した、おのれを世界の過程に委ねて、甘んじて苦を受けて、世界の救拔を待つがい」云っている。ところが、鷗外もマインレンデルも、かの「迷い」の三期説には同感しながら、この結論に達すると二人とも頭を掉っている。それで、マインレンデルは「迷いを打ち破って置いて、生を肯定しろと云うのは無理だ」と思い詰めて自殺した。しかし鷗外は頭を掉つ

ただけであった。そして、「永遠の不平家」として、「道に迷っている。夢を見ている。青い鳥を夢の中に尋ねている」と、自分で感じながら、人生の下り坂を下って行った。そして、その下り果てた所が死だということを知っていた。

私は「おのれを世界の過程に委ねて、甘んじて苦を受けて、世界の救拔を待つがいい」と云った無意識哲学の結論は、必ずしも不当な結論であるとは思われない。この哲学の結論から受ける感じも、一篇の傑れた抒情詩から受ける感じと同様なのであろうが、人間はそれをも滅

却するに忍びなく作られている。中世紀を貫いた思想だ
って、この結論と同じなのだ。

鷗外の創作は、初期の「舞姫」などは、歐洲近代の短
篇の様式を模倣したもので、当時の日本の文壇でこそ清
新であったが、今日の目で見ると、云うに足りないもの
である。「分身」などに集められた小説は、彼自身冷笑
の目で見下していた自然主義の流行に刺戟されて、筆を
執ったらしく、そのうちには独得の名作も少くないが、
そんなものよりも、他の企て及ばざる創作は、晩年の考
証的史伝である。こういうものこそ鷗外のような作家で

なければ書けないのである。文辞にも観察にも一点の塵埃を留めず、冷澄明徹、殆んど神境に達していると云つていい。

日本文学電子図書館

森鷗外の「妄想」

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館